

史話

因尾物語 ハその二

因尾通路斬の事

——主として大友興慶記による——

細分 羽柴 弘

①薩州勢、豊後の國に討入るみぎり、同國利光表にて、
仙石權兵衛尉、並びに長曾我部宮内少輔と、島津中務丞
と一戦して中務大務利を得、その勢に乗じて府内表まで
押寄せ在陣す。日州薩摩の武士、府内へ往來の時、佐
伯の内因尾という所を折々通路とす。

さる程に、天正十四年(一五八六)丙戌十二月十七日、佐
伯太郎惟定の居城榎牟礼より、軍勢殺多き因尾表に差向
けらる。すなわち惟定の下知に受けたる因尾の武士、柳
岸左馬介、同じく外記、同じく平兵衛、同じく兵庫介、
三代勘解由、柳井喜古衛門、同じく弥右衛門尉、吉良介、
人助、杉谷兵部、同じく源次郎、稗田古馬介、同じく嘉
右衛門尉、柳井雅潔介、これらの人々因尾に打出し、峯
々山々に物見を置いて待ち受くる。

翌くる十八日、日州縣に住人戸高將監を大將として、
三十騎にて押し来たる。物見急いでこれ告ぐ。

かねてより傳り岩という所の下、三竈江大羽神の前、
河をへだてて両方、また板屋という里、ここかしこの伏
兵、どつと隙の声をあげて攻めかかり、日州勢を川に追
い落とす。向いの岸にはい上ると、大羽神の二の鳥居の
右左、杉木立松原から勝手知ったる地の利によつて、お
つ取り隠んで獲縁に至るまで残らず討ち果たす。即ち其
の日の大將戸高將監は、柳井左馬介に打ちとられ、屈強

の武士三十七人、悉く討ち果たされたという。

続いて押し寄せた日州勢、敗戦に驚いて逃げ帰るを、
因尾勢は今一戦と勇立ち、追討をかけようとすると
左馬介押し止め、大將戸高を討取れば勝利は十分とさ
し、皆榎牟礼の城に引揚げた。

其の後日州・薩州の者ども、再び因尾表を往來する
こと叶わず、直入榎牟礼をまわつて府内へ往還す。
十二月十九日、因尾表に於いて討取りの首帳、臼杵に
差出し宗麟公へ披露す。即ち御神利を加えらる。

(注)

① 薩州勢 薩摩島津の軍勢、但しやて来たのは日向の軍

② 戸次川原の戦、利光に鶴賀城あり、利光宗魯死す。

③ 仙石權兵衛、秀吉の命をうけ、島津勢を打ちた。

④ 長曾我部元親、同前、戸次川原の合戦に敗れ、その子信親を戦死す。

⑤ 薩摩の太守島津義久の子家久

⑥ 佐伯氏十四代佐伯太郎惟定

⑦ 日向、國、縣は今の延岡

へ解説

時又戦國時代の末期、大友宗麟と島津義久が九州の覇
權を争っていた。戸次川の戦に敗れた大友は遠く宇佐の
龍王城まで逃げ、府内は島津の手中にあった。その頃の
物語りである。そして前回の穴圃の戦いの直後である。

当時柳井一族を中核としていた因尾勢は、平素因尾
に住んで農事にばかりはげみ、いざ合戦と云なれば一族郎党と
率いて榎牟礼城に馳せ参じていた。

たまたま薩州の軍勢、北上して豊後に侵入ということ
で、榎牟礼の下知に忝じて因尾勢は、堂々間・板屋舟迄
に迎え撃つたのであった。

少々勝ちすぎた戦いである。本当にこの通りであったか。
ここで及一忝このまゝに受けとっておこう。そして次の

首帳・神判を見ることにより。

去る十八日、薩州・日州の人衆、佐伯領往來の時、因尾口に於て數十人討捕り、首帳披見せられ候。連々油断無く御心懸に依りて、節々忠節の段感悦淺からず候。猶、田北宮内少輔に申し遣わす者也。

- 首 一 戸高將監 柳井左馬介討之
- 同 一 新名 杉谷兵部丞討之
- 同 二 源四郎討之
- 同 二 柳井兵衛門尉討之
- 同 一 同 張右衛門尉討之
- 同 一 同 外記討之
- 同 一 同 兵庫頭討之
- 同 一 同 三代勘解由討之
- 同 一 同 後藤勘之進討之
- 同 一 同 俣田右馬介討之
- 同 一 同 深田左京進討之
- 同 一 同 柳井雅樂介討之
- 同 一 同 俣田加右衛門尉討之
- 同 一 同 吉良金人介討之
- 同 一 同 柳井喜右衛門尉討之
- 同 一 同 河野藤兵衛尉討之
- 同 一 同 柳井市之助討之
- 同 一 同 深矢五郎右衛門尉討之
- 同 一 同 柳井左馬介内侍討之
- 同 一 同 外記内侍討之
- 同 一 同 雅樂介内侍討之
- 同 一 同 甚左衛門討之

- 同 一 菅右衛門討之
- 同 一 太郎右衛門討之
- 同 一 次郎右衛門討之
- 同 一 考兵衛討之
- 同 一 五郎三郎討之
- 同 一 次郎右衛門討之
- 右の外雜兵十余人討捨つ。

佐伯梅傘礼の城に、田北宮内少輔と相添置かる。義統公、宮内方への御書、その辭に曰く、
 数度申す如く候。この度は別して辛勞の由、祝着深重に候。十八日因尾表に於て、其方被官後藤勘之進、分捕高名の段、感じ入り候。追つてこれを賀すべきの祭、張は武勇に励まるる肝要に候。恐々謹言
 十一月二十八日 義統

（佐伯推定より、柳井左馬介への感状）
 この度薩州日州の人衆往來の砌り、因尾に於て数多討捕し事、喜悅せしめ候。殊に戸高將監を討捕り、粉骨の段表からず候。張は各中申合せ、武勇に励むべき事肝要に候。追て一發申付く可き者也。
 十二月二十日 恐々謹言

柳井左馬介殿 佐伯推定

へ解説
 解説の余白が有るので、左だ一つ、田北宮内少輔は友兼統の命を受け、梅傘礼佐伯氏の目付として派遣されていふものである。
 （あり）